

【エッセイ部門・大谷文芸賞】

今だからこそ考えるこれから

鹿児島県立鶴丸高等学校 第2学年 田部 快太

近頃、エッセンシャルワーカーという言葉をよく耳にするようになった。「不可欠な(エッセンシャル)働き手(ワーカー)」という意味を持つ言葉。私自身も、注目されるようになるまで知らなかったのだ。新型コロナウイルスの感染拡大で注目を集めたこの仕事。例を挙げれば、病院で働く医師・看護師や公共交通機関の運行に携わる人々などである。感染拡大が続く中でも、社会の人々の生活がまわるように働き続けてくださっている方々に改めて感謝したい。

私は、この機会に将来について考えてみようと思う。なぜなら、自分の夢である職業がエッセンシャルワーカーに分類されるからだ。そんなとき、あるテレビ番組が目に入った。バスの運転手にフォーカスを当てた番組だった。私はその番組から、心構えのようなものを学んだ気がしている。

バスの運転手は常に感染リスクと隣り合わせ。さらに数十人の命を預かり、動いていて当たり前なことだと思われているであろう、数々の責任がのしかかる仕事だ。自分の地域でも、それらのことに変わりはない。しかし、その責任を背負いながらも運行して下さることで私たちは不便に思うことのないごく普通の日常を過ごすことができる。このように、人々の生活に影響するような仕事をなぜ続けられるのか、その運転手が語ったことがとても印象深く心の中に残っている。

「楽しいから。お客さんの笑顔を見られるのがうれしいし、それが一番の楽しみです。」と。ありきたりな答えかもしれないが、私にとっては違う。自分の将来や現在が、自分の好きなことであふれている、こんなにも幸せなことはないであろうと思うと、とても感慨深い。だから自分も、将来、好きなことをして追求できるように今を大切にしたいと思う。

もう一つ、その運転手が口にした忘れられない二文字がある。「平凡」だ。自分にできることや自分しかできないこと、自分がしなければならないことに対して、一生懸命に取り組むことができ、確実にこなそうと努力することができる、特別なことでなくても、目の前にあるものを大切にできる、そんな生活を送ることができる幸せであるという意味だ。

好きなことに夢中になれる幸せと「平凡」な生活を送ることができる幸せ。そう簡単にうまくいくことではない。しかしこれが、人生の先輩から学ぶことができた教訓なのだ。よく、「自分の人生は自分で決めろ」と言われる。自分にしかない「好き」という気持ちや自分のある視点からだからこそ導き出された考えは宝物であると分かった今、この言葉の本質も見えてきたような気がする。

話は変わるが、先日、人生で初めて日本でオリンピックが開催された。今までの集大成を発揮すべく最後まで諦めずに全力で競技に参加するアスリートからは、計り知ることがで

きないくらいの感動をもらった。一方で私が注目するのは、ボランティアや大会を裏で支えてくれている人々だ。海外の人々が日本のボランティアによるおもてなしに感銘を受けている様子は、メディアにも取り上げられ、注目を集めた。しかし、そのボランティアやメディア関係者、選手やスタッフの会場間はバス移動。運転手は全国から集まり、不慣れな街中を運転した。そんな中でもおもてなしの精神を欠かさず、目の前の任務をこなした運転手は、このような言葉を口にした。「東京オリンピックに裏側の立場として関わることができたのを誇りに思う。」と。確かにバスの運転手を含む、エッセンシャルワーカーの仕事は目立たないかもしれない。それは日常のごくわずかな一部にしか過ぎないからである。しかし、その仕事が無くなってしまえば生活は成り立たない。それほど重要な仕事であるからこそ、「楽しい」と思えなければ続けることができないのであろうか。

私たち人間は、どうしてもアスリートやアーティスト、偉人の言葉から学ぶことが多くなってしまう。もともと、その方々から感動を受け取ることも多いし、背中を押してくれることで、前へと歩み続ける勇気ももらえる。しかし、私はもっと身近な人に目を向けてみたい。自分に対してしてくれていなくても、その人のさりげない一言や行動、様々な事柄に対する向き合い方から学べることもきっと多いだろうと思う。自分にとっての今の「幸せ」と将来の「幸せ」は何なのか。じっくりと向き合っていくとともに、「平凡」な生活の中にどれだけ自分らしさを出せるのか。自分なりに試行錯誤を繰り返しながら、前へ進み続けていきたい。